■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

11　中沢新一「東京タワー」

●参考　中沢新一『アースダイバー』【291/N20/1】『アースダイバー東京の聖地』【675/N8/1】

（北野高校図書館）

■目標

■追跡

①　小学生のときにはじめて東京タワーにでかけたとき、華奢な感じのその鉄塔にはさしたる印象はもたなかったのに、塔のまわりの土地の雰囲気に、なにかこの世ならざるものを感じて、背筋にぞくっとするものを感じたのをよく覚えている。増上寺の裏手ということもあって、電波塔のまわりはいたるところが墓地だった。それだけならまだしも、墓地の背後には鬱蒼とした灌木の林が広がり、薄暗い林の内部にはなにか小山のようなものがたくさん見える。いったいここはどういう場所なのだろうと、ひどく気になった。私はそこに死霊の気配を感じ取って、おびえたのであった。

小学生の私は、東京タワーのまわりの土地に死霊の気配を感じ取っておびえた――という導入。へえー、そんなところなんや――。

②　タワーの内部に入ってみて、さらに驚いた。そこがお祭りの夜の神社のような雰囲気をたたえていたからである。そこには土産物屋やマダム・タッソー風の蝋人形館などが、所狭しと立ち並び、神社のお祭りで見かけた蛇娘やろくろ首や人間ポンプなどが、妖しい芸を見せていてもすこしも不思議ではない、死の香りのみちみちた土俗性でむせかえるほどなのだ。大きくなって旅をするようになってから気がついたことだが、子供時代の思い出の中の東京タワーは、下北半島にある恐山と驚くほどよく似ていた（その印象を再確認するために、最近また東京タワーへでかけてみたが、本質的にはなにも変わっていなかったことに、むしろ驚いた。土産物屋も蝋人形館も以前のままだった）。なぜ電波塔がこれほどまでに死の香りを発散していなければならないのか。私はそれ以来、東京タワーの立っているあの土地のことが、気になってしようがなかった。

東京タワーの周囲＋内部＝死の雰囲気。なぜか？――これが**問い**。答えを追っかける！

③　ここは昔はなにか特別な土地だったのではないのだろうか。そうでなければ、これほどまでに強い地霊の発散している力を、うまく説明することができない。そのうちに私は、たまたま手にした考古学研究の中に、東京タワーの立つ芝増上寺裏のあの土地が、かつて大きな死霊の集合地であったことを知り、ようやく長年の疑問を解くことができたのである。

仮説――そこは特別な土地＝かつて大きな死霊（古墳群）の集合地であったから。　→　答え

④　増上寺の寺域に点在していた小山の群れが、前方後円墳をはじめとするりっぱな古墳群であることを発見したのは、日本考古学の基礎を築いた坪井正五郎だった、と言われている。彼は英国に近代考古学を学ぶために留学した帰路のつれづれに、子供時代によく遊び場にしていた増上寺の裏手の森のことを、思い出していた。地面を掘り返すと、奇妙な土器のようなものが出てきた、あの小山はじつは古代の遺跡だったのではないか。帰国後すぐにその地の発掘を試みた彼は、芝のその森がまぎれもない古代遺跡であったことを確認する。増上寺を中心とするそのあたりは、かつて死霊のつどう神聖な土地であったのだ。

かつて死霊のつどう神聖な土地だったとしても、それが「東京タワー」の立つ現代まで、その死霊の雰囲気が継続するものだろうか？　そういう疑問が湧くよね。湧かないといけない。ここが、問いの二段目。能動的に、テキストに問いかけつつ読んでいく。問う→答を追いかける→また問う。答えを見失うこともある。そこにはあるべき答えがないこともある。しかし、働きかけつつ読まないと、議論自体を捉え損ねるし、批判的に読むこともできない。

⑤　今日の発達した地質学と考古学の成果から見えてくるのは、いま東京タワーの建てられている場所が、海原に突き出した大きな半島だったという、意外な光景である。縄文時代にいまよりも地球が暖かく、それまで地球を厚く覆っていた氷河が溶け出していた頃、東京湾はいまよりもずっと内陸にまで入り込んでいた。その頃は銀座も新橋もなかった。日比谷の入り江はずっと深く陸地に浸入して、都心部は複雑なフィヨルド状の地形をしていた。そういう時代に、芝のあのあたりの土地は堂々たる大きさをもって、広々とした東京湾に突き出た半島の姿をしていたのである。

事実。縄文時代、そこは半島だった。

⑥　このあたりに住んだ縄文人たちにとって、芝の半島は「サッ」と呼ばれる重要な聖地だった。「サッ」という音は、ものごとの境界をあらわす古代語として、大切な場面で使われる言葉だった。人間の意識（心）が、自分の能力を超えた領域に接触しているのを感知したとき、古代の人たちはそこに「サッ」があらわれていると考えたのである。「サッ」は人間的なものとそれを超越したものとがたがいに触れあう、接触点や陥入の場所のありかをしめす、野生的な概念である。そこから、「ミサキ」や「サカイ」などの古い日本語が生まれた。そこは超越的な領域、死の領域との境の地帯をあらわしている。そして、「ミサキ」でもある半島は、そのような超越的な死の領域に突き出されたアンテナのような地形として、重大な意味を持ち続けてきた。

みさきは、死の領域との境。海が死の世界だからか――と推測しつつ進もう。

⑦　芝の半島は、東京の中でも有数な「ミサキ」だった。そのためここには縄文時代以来、死者の埋葬にかかわる重要な聖地が設けられてきた。時代が下っても、そのあたりが死霊の世界とのコンタクト地帯であるという感覚は失われなかったから、豪族たちもきそって大きな古墳を、芝の高台につくった。そこからならば大海原は一望のもとであり、死霊の棲む空間と考えられた海の彼方に向かって、手を差し伸べることさえできそうだ。いずれそこには大きな寺が建てられ、古代に墓地であった記憶を頼りに、広大な墓地も開かれるようになった。しかし時代は変わっても、人々はあいかわらずこの土地に、超越的領域に向かって立てられた敏感な「サッ」のアンテナ機能を感じ取ってきたらしいのである。

ほんとに時代が変わっても死の雰囲気が継続するのか、と問いを立ててみたが、逆に、現実に今も死の雰囲気が保たれていることが、時代を越えて〈死の世界との境目の感覚〉が受け継がれることの証拠になっている、と考えるべきなのだろう。

⑧　読解1（どのようなことか？）その極め付きが、東京タワーなのである。戦後このあたりは一面の焼け野原だった。朝鮮戦争をきっかけとして、経済活動がふたたび活発化の様相を見せはじめたとき、日本の解体業者のもとに、朝鮮戦争で廃棄処分となった戦車をまとめて解体してほしいという、思いもかけない大仕事が舞い込んできた。そのとき、戦車をつぶして手に入った良質な鉄材をもとに、世界一の（ということはエッフェル塔よりも高い、という意味だ）電波塔を東京に建てようというアイディアが、にわかに現実味をおびてきた。

具体的な事実の紹介。朝鮮戦争の「おかげで」日本は経済復興のきっかけをつかめた。

⑨　タワーの予定地の第一候補は上野の森だったが、ここにはすでに美術館や大学が建設されることになっているので、第二候補の芝に白羽の矢が立った。興味深いことには、上野の森も古代東京湾に突き出た北の半島の一角として、古くから古墳や埋葬地として知られていたところである。上野から芝へ。この決定にはなにか日本人の心の深層で働く無意識の思考を、感じ取ることができる。高い電波塔の建てられるべき場所は、すべからくそのような土地でなければならない。無意識がそう命じたのであろう。

高い電波塔の建てられるべき場所は、死の世界との境目でなければならないと、日本人の心の深層で働く無意識が命じた。なんでやろ？　どういうことやろ？　この時点でぴんと来るかな？

⑩　戦車の廃材はみごとな鉄塔となって、芝の墓地群のまん中に蘇った。エッフェル塔よりもわずかに高い、文字どおり当時の世界でもっとも背の高い電波塔である。東京タワーははじめからエッフェル塔を意識していたのである。高さにおいて、パリの電波塔は凌駕された。読解2（どのようなことか？）しかしその高さの内容は、同じではなかった。たとえばロラン・バルトは有名な『エッフェル塔』というテキストで、エッフェル塔を「天と地をつなぐ橋」と表現した。彼がそこで「天」と言ったのは、いと高きところにいます天なる神のことである。しかし、我が東京タワーがなにか超越的なる領域とのあいだに掛け渡される橋であったとしても、それは「いと高き天」ではなく、天空でもあり海の彼方でもあり、あるいは地下界にあると考えられた死霊の王国に向かって突き出されたアンテナとしての橋なのである。

ここでやっと意味がはっきりした。「〈海＝死〉の世界に突き出た半島」のイメージが、「〈天＝死〉の世界に突き出た塔」のイメージへと重なっているという解釈なのである。〈突き出る死との境目〉の無意識のイメージが、そこに東京タワーを建てさせた。

無意識のイメージというのは、文字通り無意識なのだから、意識できないのだが、現象を深く観察すると、みえないところに存在しているしくみを想定し、そのしくみ（構造）がある現象を生じさせていると考えるとうまく説明できることがある。

じつは自然科学はみんなそうでしょ。観察・実験→現象が生じるしくみの仮説を立てる→検証のための観察・実験。

人間の集合的な意識の中にも、ある種のしくみ＝構造が存在していると考えると、いろんな人間が集合的におこなう営みの意味が解釈できる場合がある。

なぜだかわからないけど、塔を建てたくなる。塔を建てるって素敵だね、ってみんなが心のどこかで思う。財力や技能や人材が投入され、なかなか困難な塔作りが始まる。一方には、塔より、普通に住める家を作る方がいいじゃん、という思いもあるが、そんな合理的な思考を超えて、なぜか、がんばって作ってしまう。なんでやろ？

その一。ヨーロッパの人々（キリスト教の信者）が塔を作りたくなる心のしくみを解釈すると――「天（神）と地（人間）をつなぐ橋」を作りたい！っていう欲求のあらわれ。これが、本文で紹介されていた解釈。確かに、ヨーロッパの教会など、尖塔がニョキニョキ立ってる。

その二。日本列島の人々が塔を作りたくなるのは――天空・海の彼方・地下界にある死霊の国に触れたい！っていう心のあらわれ。これが筆者の論だ。半島は、死の世界へ水平に突き出ている。塔は、上に垂直に突き出す。ベクトルの方向は異なっても、その先にあるのが死の世界だというのは共通している。そんな深層の心のしくみを提示しているのだ。

深層心理についての〈仮説〉は、自然科学のように客観的に検証することは、なかなかむずかしい。心は自分の中にあるし、集合的無意識なんて解剖するわけにもいかない。

とはいえ、「あ。そうだよな」と腑に落ちる解釈というものは存在するし、それによって、よくわからなかったことが見えるようになることはある。そのおかげで、日々の営みにより豊かな意味が加わったり、わけがわからなかった苦しみから解放されることも、実際にある。

東京タワーの〈意味〉をめぐる思考はどうかな？　興味が湧けば、元の本を読んでみるといい。

⑪　東京タワーは「天界」と「地上界」という、明確に概念化された二つの領域をつなぐのではなく、境界を越えるともはや思考でも言葉でもとらえることの不可能な、死の領域にさしこまれたセンサーとして、既知と未知とをつないでいる。さらに言えば、このセンサーないしアンテナは、生と死を、過去を生きた死者の魂といまだ生まれ出ていない未来の生命とをつなぎながら、不確定な空間の中を揺れ動いている。

「東京タワー」を古代からのイメージの連続から捉えると、こんなふうに見えるのか、という感じ。図示してみよう。

×「天」――塔――「地上」　※これはヨーロッパ。

○「既知（言葉や思考の生きている生の世界）」――アンテナ――→「未知（死の領域・未来の生命）」

ここで、読解問題1と2を考えよう。

読解問題1「その極め付きが、東京タワーなのである」とはどのようなことか。

「死の世界へ突き出たアンテナ」ということが読み取れているわけだから、あとは、問いの要求する形に整えればいいだけ。「その」の内容に沿って整理する作業だ。前段落を〈時間順〉に整理、メモする。

●芝の半島（東京タワーのある場所）＝死霊の世界とのコンタクト地帯

1　縄文時代……死者の埋葬にかかわる重要な聖地あり。

2　古墳時代……大きな古墳あり。

3　その後……大きな寺、広大な墓地。

4　今……東京タワー。

●「その」が直接指すところ

「人々はずっとこの土地に、超越的領域（死霊の世界）に向かって立てられた敏感なアンテナ（コンタクト）機能を感じ取ってきたこと」

文章化する。

（解答例1）人々は、縄文時代以来ずっと、芝の半島に、超越的領域（死霊の世界）に向かって立てられた敏感なアンテナ（コンタクト）機能を感じ取ってきたが、東京タワーは突き出た電波塔という形と機能からいっても、その機能を究極の形で示しているものだということ。

波線部は、もっと消化できる。傍線部は、「極限」という意味合いを説明したもの。半島＝海へ突き出る、というのも、突き出てはいるが、センサー・アンテナという機能、突き出方ではいえば、タワーは究極的だよね。ここはなんとか書きたいところ。

（解答例2）人々が古代から感じてきた、突き出ることによって死の世界を感じ取る半島の機能を、東京タワーは天に突き出た形や電波塔という機能として、きわめて端的に示しているということ。

読解問題2「しかしその高さの内容は、同じではなかった」とはどのようなことか。

図示で対比した内容を言葉で表現する。図を描いて、外へ出す。整理する。それができれば、文章にするのも簡単だ。言葉によるメモにすると、

・エッフェル塔＝天なる神と地をつなぐ橋。

・東京タワー＝天空、海の彼方、地下界にあると考えられた死霊の王国に向かって突き出されたアンテナとしての橋。

（解答例1）エッフェル塔が、天なる神と地上界という明確に二分された世界をつなぐ橋であるのに対し、東京タワーは、天空などに広がる、思考や言葉では捉えられない死の世界に向かって突き出されたアンテナとしての橋であるという違いがあるということ。

未知と既知という対比を用いて整理することもできる。エッフェル塔は、既知＋既知をつなぐが、東京タワーは、既知から未知を探る。断絶のあるA地点とB地点をつなぐものは、橋とか道だが、AからはBの存在は知られている。また逆も。しかし、AからはBの存在が自明ではない場合、AはBのようすを〈探らなければならない〉。アンテナ、センサーという喩えは、その探査の感覚をあらわしている。私たちは、手や鼻や舌や視線を〈突き出して〉それが何であるかを探る。それが、〈突き出すもの／こと〉が、未知の存在を探査する感覚として感じられる由来であろう。

（解答例2）エッフェル塔は、地上界を、神の世界という、キリスト教の教義にとっては既知の世界とつなぐものであるのに対し、東京タワーは、既知である生者の世から、未知の世界である死の世界を探るためのアンテナであるという違いがあるということ。

死んだら天国に行く、というように概念化＝教義化されているのではない、古来からの日本列島の住民たちの、死の世界への、おそれのような、薄暗いような感覚。東京タワーがそれを示しているなんて、意外でしょ？――筆者はそういいたいのだ。

⑫ 読解3 東京はじつに不思議な都市ではないか。ルイ・アラゴンは農夫の目をもってパリを散歩し直してみると、そこがなんと奥深い神秘にみちたシュールな都市に見えてくることかと、その驚きを『パリの農夫』に描き出してみせた。それならぼくは縄文人の野生の思考を身につけて、東京の散歩へとでかけよう。パリにエッフェル塔があるのなら、ここには東京タワーがある。そしてそれぞれの電波塔は、そこに住む住民の抱く「超越性の思考」を、あからさまなかたちで表現してみせている。我々のリアルはどこにあるのか。深遠なその問いかけへのひとつの答えが、東京タワーにはひそんでいる。

読解問題3　筆者が「東京はじつに不思議な都市ではないか」と考えるのはなぜか。

「東京タワーが縄文以来の感覚を示しているなんて、意外でしょ？」。東京はなんと不思議な都市だ！とはそういうことだ。どこが不思議か、に答えるように答案を作る。

不思議な箇所を見つけよう。一見、「え？」ってなるようなところ。矛盾っぽく感じられるところ。それは、ここだ。

「それならぼくは縄文人の野生の思考を身につけて、（現代最先端の都市の一つ）東京の散歩へとでかけよう。」

すると何がわかるか？

「塔は、そこに住む住民の抱く「超越性の思考」を、あからさまなかたちで表現している」ことがわかる。

現代最先端の都市の機能が、縄文人の野生の思考をなぞっていることに気づく。

その気づきが「不思議さ」の内容だ。一見、縄文人の野生の思考などとは無関係な東京タワーという東京を代表する建築物が、それとつながっている。そこを表現できるか。

（解答例）東京タワーという東京を代表する建築物が、縄文人から続く死への感覚を表現していたように、東京は、一見高度に文明化された都市に見えながら、縄文人の野生の思考が今もなお残っている場所だから。

■**読解問題**

1「その極め付きが、東京タワーなのである」とはどのようなことか。

2「しかしその高さの内容は、同じではなかった」とはどのようなことか。

3　筆者が「東京はじつに不思議な都市ではないか」と考えるのはなぜか。

■**発展問題**　出典を読み、最後の段落で筆者が問いかけている「我々のリアルはどこにあるのか」という問いについて、論じてみよう。

●重要語「野生の思考」＝元は、フランスの文化人類学者レヴィ＝ストロースの用語。ぜひ、「野生の思考」「100分 de 名著」で検索し、次のページを読んでみましょう。

http://www.nhk.or.jp/meicho/famousbook/60_yaseinoshikou/index.html